

ガザ虐殺戦争——何ひとつ問題は解決していない

岡田剛士

昨年一二月二七日に開始された、イスラエル軍によるガザ虐殺戦争とも言い得る苛烈極まりない一方的な殺戮攻撃は、二二日間で一三〇〇人以上のパレスチナ人を殺し、五四〇〇人以上を負傷させ、二万二千棟以上の家を倒壊・損壊させた。一月一七日のイスラエル側からの「一方的停戦」宣言が一つの区切りとなったけれども、問題は何ひとつ解決していない。

今回のガザ戦争に関連して改めて実感したのは、マスメディアによる報道のひどさ、だった。紙幅の都合もあるので二点だけ挙げておく。

その一つは、ハマース（「イスラーム抵抗運動」とイスラエル国家を横並びにして「双方の暴力の応酬／報復合戦の激化」などといった図式の中で今回の戦争を報じたこと。この図式は、圧倒的に強力な兵器を使ったイスラエル軍による一方的な暴力の行使という現実を、全く伝えていない。もう一つ、マスメディアが枕詞のように使ったのが、「ガザを実効支配するハマース」という表現だった。これは、状況としての、

(1) 二〇〇五年秋に当時のイスラエル首相シヤロンのイニシアチブでイスラエル軍と入植者がガザ回廊から「一方的撤退」を行ったこと（しかし、これが逆に意味したのは、イスラエルによるガザ回廊全域の完全な封鎖＝巨大な監獄化であった）、

(2) 二〇〇六年一月のパレスチナ自治政府評議会議員選挙で、ハマースが、アッバース大統領率いるファタハ（「パレスチナ解放運動」）を抑えて圧勝したこと、

(3) 翌〇七年六月、ハマースがガザ回廊でファタハ系とされる武装勢力を圧倒したこと、などを背景として出てきた表現なのだろう、と推測することは不可能ではない。

しかし、そもそも封鎖された「監獄」の内側でのハマースによる「支配」であり、ガザ回廊とイスラエルあるいはエジプトをつなぐ数ヶ所の境界（検

問所）はイスラエル軍の管理下にある。また、制空権も制海権もイスラエル側にある。つまり、ハマースによるガザ回廊の「支配」は、言わば「無効支配」でしかないのだが、それを「実効支配」と書くマスメディアは、イスラエルの政策としてのガザ回廊の監獄化（＝形を変えた占領の継続）という現実を隠蔽している、と言うほかない。

今回のガザ攻撃に対して、実に様々な抗議行動が、しかも各地で継続的に行われた。ガザ回廊の現地の状況が、他ならぬその地に生きるパレスチナ人たちの発信・送信する、インターネット経由での写真や動画、レポートや電子メールなどで世界中に伝えられたことも大きな力になったと思う。日本では、それらを日本語に翻訳する作業を主体的に担う人々の努力もあった。

そして、こうした取り組みの中から、さらに継続的な取り組みを模索してゆこうとする動きが出てきているのは、ひとつ新しい要素かもしれない、と思う。つまり、これまでの、例えば駐日イスラエル大使館への緊急抗議行動などの場合、そのほとんどが単発の行動で、一度、あるいは二度とドタバタと取り組まれて、それでとりあえずは終わり、というパターンだった。しかし今回、「一方的停戦」を受けても、なおも継続的にパレスチナに、ガザ回廊の占領・封鎖状況に注目しながら、例えばイスラエル製のポイコットや、あるいはイスラエルの政府首脳を国際刑事裁判所に訴追するよう働きかける取り組みができないだろうかなどといった切り口から、かなり具体的な話し合いが開始されているのだ。

面倒なことや大変なこともいろいろとあるけれど、何とか頑張ろう。

（おかだ・つよし／ミッターン（パレスチナ・対話のための広場）